

在まで再発は認めていない。過去に深達度MMで発見された食道内分泌細胞癌の報告はなく、極めて稀な症例であると同時に、予後も明らかではなく今後化学療法を継続し、十分な経過観察が重要と考える。

3 肺腺癌切除3年後に広範な食道転移をきたした1例

清野 豊・加藤 俊幸・佐藤 俊大
佐々木俊哉・船越 和博・本山 展隆

県立がんセンター新潟病院内科

症例は76歳の男性。3年前の2005年2月に左肺腺癌の切除を受け、pT1N0M0 IAであった。術後の経過は良好で胸部CTでも異常を認めなかったが、2008年6月上旬から食道の通過障害を自覚するようになり、下旬には嚥下困難となったため近医を受診し入院した。入院後の上部消化管内視鏡検査では中部と下部食道の狭窄から食道癌が疑われ、生検では腺癌と診断された。ED栄養を開始するとともに、7月中旬に当科へ転院した。入院時の血清CEA 1.8, SCC 0.7, TPA 73であった。内視鏡検査では切歯列から26cmの食道には顆粒状から小結節の集簇が、34cmと40cmには顆粒と軽度陥凹の混在した病変の多発を認め、ルゴール染色では不染帯が認められた。生検では各病変とも粘膜下を中心に低分化な腺癌の浸潤とリンパ管侵襲が認められた。免疫染色でCK7(+), CK20(-), TTF-1(+)であったことから、肺腺癌の食道壁内への転移と診断された。

肺癌の進行による食道狭窄はときにみられるが、食道壁内への転移は少ない。早期肺癌の術後3年目の再発が、食道転移として生じた稀な症例である。

4 化学放射線療法時代の食道癌の剖検所見

末山 博男・福田 貴徳・関谷 政雄*
酒井 剛*・尾矢 剛志*

県立中央病院放射線治療科
同 病理診断科*

当科の食道癌登録症例(1999-2007)387例中剖検した35症例を今回の検討対象とした。全身に腫瘍残存を認めなかったのは2例のみであった。局所に腫瘍残存を認めなかったのは13例(37%)であったが、大多数はリンパ節転移または遠隔転移を認めた。死因に関しては原病死では食道穿孔を含む肺合併症が多かった。不顕性の前立腺癌を4例と高率に認めた。

5 胃癌術後卵巣転移に対し weekly Paclitaxel 療法が奏効した1例

羽入 隆晃・松木 淳・神田 達夫
小杉 伸一・矢島 和人・池田 義之
石川 卓・坂本 薫・若井 淳宏
畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

高度進行胃癌術後に卵巣転移を来したが weekly Paclitaxel 療法が奏効した1例を経験したので報告する。

症例は51歳、女性。99年11月に食道胃接合部癌に対して脾臓合併胃全摘、経裂孔的食道切除を施行した。総合診断はT4N2H0P0M0Cy0 Stage IVであり、術後化学療法としてMTX+5FU療法を施行した。07年2月に転移性肺腫瘍に対して右肺中葉切除+右S3部分切除を施行した。その後、07年07月より腹部膨満出現し、精査にて癌性腹膜炎、左卵巣転移の診断に至った。08月より weekly Paclitaxel 療法(100mg/day, 3投1休)を開始し、08年4月の画像検査にて腹水および左卵巣腫瘍ともに消失しCRを得た。現在も weekly Paclitaxel を継続しCRを維持している。

胃癌卵巣転移は予後不良とされるが、近年、化学療法奏効例が散見されつつあり、若干の文献的考察を加えて報告する。